

イザヤ書 52：7～10

ルカによる福音書 10：1～16

「神の国が近づいた」

<エルサレムへ向かうイエスさま>

ルカによる福音書を最初から読み進めて、イエスさまがガリラヤ地方での伝道を終えられて、いよいよエルサレムへ向かう決意を固められた、そのような場面に入りました。

イエスさまがエルサレムへ向かわれるのは、そこで十字架にかかって死に、復活し、そして天に上げられるためです。イエスさまはそうして苦しみを受け、ご自分の命を与えて下さることで、わたしたちの罪を赦し、滅びの死を引き受け、わたしたちを永遠の命と復活へ導いて下さいます。わたしたちが父なる神さまの許に立ち帰り、神さまと共に生きる者となるために、この救いの御業を成し遂げて下さるのです。

前回のところでは、この救い主イエスさまに従うとはどういうことか、ということが語られてきました。そして、これまで語られてきたこと、また今日語られることは、2000年前の弟子たちのこと、というだけでなく、今を生きるわたしたち信仰者、また教会の歩みについても視野に入れて語られています。わたしたちは、この御言葉を教会のこととして、自分のこととして聞きたいのです。

さて、9：23でイエスさまは「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました。わたしたちは、救いさえ、自分の力で何とかしよう、努力や、善い行いで手に入れよう、思想や哲学で解決しようと考えます。しかし、わたしたちは自分で自分を救うことは出来ません。神さまに遣わされたイエスさまに、救っていただき、背負っていただき、生かしていただくしかないのです。自分の思い、自分への固執、自分中心の思いを捨てて、イエスさまがわたしの罪も苦しみも死もすべて担って下さった、その御跡を辿っていく他ないのです。

そのイエスさまに従う歩みは、罪の中であってどうしようもないわたしを神さまに受け入れて下さったように、わたしも最も小さい者を受け入れていく。自分とやり方が違っていても、同じお一人のイエスさまに従う者なら共に認め合い歩んで行く。敵対するわたしたちを神さまが愛して下さったように、わたしたちもまた誰かに敵対されても、敵意を抱かない。

そして何よりも、神の国、神のご支配を求め、神さまの恵みを土台にして生きること。地上のこと、自分の思い、家族のこと、何もかも、主のご支配の御手の中に置いて、従ってきなさいということ。そのようなことが教えられてきました。

<七十二人の派遣>

そして今日のところです。イエスさまは、ご自分に従う者たちの中から七十二人を選び、

これからご自分が行くつもりのすべての町や村に遣わされました。伝道のために派遣した、ということです。

遣わされる者たちが語ることは「神の国が近づいた」ということです。

神の国とは、神のご支配、神さまの恵みのご支配ということです。わたしたちは神さまに逆らい、神さまから離れ、罪と死の支配に捕らわれていました。しかし、イエスさまがエルサレムで、十字架と復活と昇天の御業によって、わたしたちを罪から解放し、死に打ち勝ち、わたしたちを神さまの命のご支配の中で生かして下さる。これが神の国です。

ですから、神の国はイエスさまによって実現します。イエスさまが来られる所に、神のご支配があります。「この方があなたのところに来られる。あなたは罪から解放され、神の恵みに生きることが出来る。この方を迎え、受け入れなさい。この方を信じなさい。あなたは、神の恵みのご支配に招かれている。」

このことを告げるために、七十二人はイエスさまご自身に遣わされたのです。

ところで、この七十二という数は、旧約聖書の創世記 10 章において、ノアの洪水の後に地上に現れた民族の数です。実は、ヘブライ語では七十、ギリシア語では七十二となっていますが、とにかくユダヤ人は七十二を全世界、全民族を表す数として用いています。

つまり、イエスさまは全世界の人々に、すべての民族に、神の国を告げ知らせようとしておられるのです。

そして、二人ずつ遣わされた、とあります。これは旧約聖書においては、裁判などで立証するのに必要な証人の数です。立証するには、二人から三人の証人の証言が必要なのです。

つまり、「神の国が近づいた」「神のご支配がイエスさまによって実現する」と告げることは、何か思想とか、哲学とか、抽象的な表現とかではなくて、証言すべき事実である、ということなのです。

遣わされた者たちは、実際に神さまに遣わされた救い主イエスさまと出会い、この方と共に生きる恵みに与っています。救いに与った者たちは、皆そうです。わたしたちもまた、神さまのご支配のうちに実際に生かされています。

この確かなことを証言すること。実際に生きて働いておられるイエスさまを示すこと。これが、遣わされた者の言葉なのです。だから、お話の上手下手とか、面白い面白くないかではありません。上手く伝えられない。それでもかまいません。大切なのは、本当に、救い主がおられる。わたしはこの方と共に、この方の恵みで生きている。そしてあなたのところにも来られる。罪を赦し、永遠の命を約束して下さる。このことをはっきりと証言することなのです。

<どのように遣わされるか／収穫>

そして、イエスさまは七十二人に、遣わされることがどういうことかをお教えになりました。2 節ではこう言われています。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

これはつまり、神の国を告げるために遣わされる働きは、収穫の働きだ、ということです。すでにたわわに実っていて、もう実がこぼれ落ちんとしている。それを刈り入れるだけの仕事です。一から荒地を開墾して育てなさいとは言われていません。しかも、人が足りないくらいの豊作である。急いでたくさんの人を呼んできて、一緒に実りを収穫しなければならぬ。だから、多くの働き人と共に、この仕事をしなさい、ということです。

これほどの実りが、先にイエスさまによって約束されている。そんな働きなのです。

しかしわたしたちは、この実りの約束をしっかり見つめることが出来ず、伝道しても手ごたえがない。まったく伝わらない。自分のやり方が悪いのか。こんな社会だからだめなのか。あれやこれやと考えます。

でも、イエスさまは、わたしたちに人を救えとは仰っていません。そんなこと、自分さえも救えないのに、出来るわけがありません。苦しみを受け、十字架に架かり、復活して人の罪を赦し、生かして下さるのは、イエスさまがして下さることなのです。種を蒔き、土を耕し、雑草を抜き、汗水流して育てられたのは、神さまです。そして、神さまの畑は豊かに実った。救いの御業は、イエスさまによって成し遂げられた。あとは、収穫するだけなのです。

収穫と言うのは、喜びの仕事です。このもっとも楽しい、喜びの仕事に、神さまはわたしたちを用いて下さる。神さまの大きな喜びに、一緒に与らせて下さるのです。それが、神の国が近づいたことを告げる、という務めなのです。

「救いの御業はイエスさまによって実現した。あなたは罪を赦される。あなたは復活の命に生かされる。このお方が来られるから、このお方があなたを恵みに招いておられるから、この方を受け入れて下さい。あなたもこの方を喜んで迎えて下さい。」これが、わたしたちが仲間と共に喜んで畑に入って行って、豊かな実りを収穫するという仕事なのです。

<どどのように遣わされるか／狼の群れに小羊>

ところが、その続きの御言葉は、ちょっと怖いと思われたのではないのでしょうか。「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。」これは、わたしが大阪の教会から東京神学大学に入学する時に、教会員の方のメッセージカードに書かれていた御言葉でもあります。「えっ、こわい」と思いました。

狼の群れに小羊を送り込んだら、どうなりますか。まあ、間違いなく食べられます。伝道に遣わされるというのは、そんな危険なところ、怖い所、不安なところに送り込まれて、そして死んでしまうということかな。そんな風に思ってしまいます。実際、イエスさまは、ご自分に従う者たちが迫害を受けるということを仰っています。神さまに逆らう人々、受け入れられない人々に、神さまの恵みを告げ、受け入れるようにと語るのですから、そこに反発や敵対が起こるのは当然のことなのです。神の御子であるイエスさまご自身が、神に遣わされた救い主であるのに、受け入れられず、軽蔑され、罵られ、排除され、殺された。そのような歩みをなされたのです。わたしたちは、この方と一つになって、後に従って行くのです。

でも、実はこの御言葉も、収穫の話と同じことです。わたしたちは、敵対する人と戦って、相手を打ち負かしたり、倒したり、そういうことは何もできない、はなからそんな力はない、ということです。

伝道において、救いにおいて、わたしたち自身は何かをする力を全く何も持っていません。自分では何も出来ない。そういう存在なのです。種を育てて、実らせることも、わたしたちには出来ない。でも、神さまがして下さいました。敵対する者に対しても、それは神さまが導いて下さることであり、わたしたちはそうになったら足の埃を払い落として、立ち去ることしか出来ないのです。相手を回心させたり、救ったり、新しくしたり、それはわたしたちには出来ません。神さまがして下さいます。

敵対する者も、自分を苦しめる者も、そして自分自身のことも、主にお任せする。わたしたちは何も出来ないからこそ、遣わして下さいます主が成し遂げて下さり、主がわたしたちを守って下さるのです。

だから 4 節には「財布も袋も履物も持って行くな。」というところがあります。これは 9 章のはじめに十二弟子が使徒として遣わされた時にも、「旅には何も持って行ってはならない」と言われたのと同じことです。自分の持ち物、自分の力、自分の賜物、自分の知恵、そういったものには一切頼るな。ただ、神さまにのみ頼りなさい。神の力にのみ頼りなさい、ということです。

救いを告げ知らせる働きは、どこまでもイエスさまの御業によって、どこまでも神さまのお力を頼って、祈りつつ、お委ねしつつ、なすべきことなのです。そこに、神さまの力が、わたしたちの思いを超えて働いて下さるのです。

今日の最後の 16 節のところには、「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである。」とあります。

イエスさまに救われ、生かされ、結ばれたわたしたちは、イエスさまと共にあり、またイエスさまを遣わされた天の父なる神さまとも共にあります。わたしたちがイエスさまに遣わされて、聖霊に強められて語る言葉は、イエスさまご自身が働いて下さる言葉であり、またそれは天の父なる神さまの御心を表すお言葉なのです。

こんな大きな力ある御言葉を、わたしたちは託され、遣わされ、人々に、隣人に告げるために用いられているのです。

そして、神の国が近づいたという御言葉を聞いた人に、イエスさまご自身が出会って下さり、救いの御業を行なって下さり、恵みを注いで下さる。わたしたちの力では出来ないことを、収穫の主が、わたしたちを、教会を用いて行なって下さる。

わたしたちはこのような豊かな実りの約束のもとで、喜びの務めにあずかりつつ、主に守られつつ、神さまと共に歩むことを許されているのです。

<迎える人、迎えない町>

さて、イエスさまはどこかの家に入ったらこう言いなさい、と言われてました。「この家に平和があるように。」平和は、ヘブライ語のシャロームです。この平和は、ただ安らかであるとか、争いがない、という意味ではありません。わたしたちと神さまとの間に平和があること。神さまと和解していること。神さまが共にいて下さるということです。

「平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。」平和の子とは、神さまから遣わされたイエスさまの、恵みのご支配を信じる人。イエスさまが実現して下さる神の国を信じ、救いを受け入れる人のことです。その人のところには、神さまとの平和が、恵みが留まる。神さまが共にいて下さる。イエスさまがその人を救いの恵みによってご支配して下さる、ということです。

そして、もし町が迎え入れないなら、そこでは足の埃を払い落として、あなたたちはもう立ち去りなさい。しかし、「神の国が近づいた」と、このことははっきり告げて行きなさいと言われるのです。

イエスさまを受け入れない町のことを、イエスさまは嘆かれます。イエスさまが「お前は」と言って呼びかけておられる、13節のコラジン、ベトサイダ、そして15節のカファルナウムは、どこもガリラヤ地方の町で、イエスさまがこれまで神の国を伝え、そのしるしの御業を数多く行ってこられたところです。

イエスさまご自身が来て下さり、出会い、招きを受け、恵みを受け、救いを知らされている。それなのに、受け入れず、拒否し、イエスさまを救い主として迎えない。

これは、神さまの恵みを蔑ろにし、イエスさまの救いの御業を捨て去り、与えられる救いを自ら無に帰してしまうことなのです。

神の国が告げられるところ、イエスさまが来られ、救いへと招かれるところでは、人はそれを受け入れるか、受け入れないか、どちらかの態度を取るようになります。十字架の死が告げ知らされる。復活の命が告げ知らされる。それは、聞く人に命をもたらすものですが、受け入れないならば、罪と死に留まることになるのです。

神の国を告げるとはそれほどの事です。しかし、遣わされた者がその責任を負うことは出来ません。足の埃を払うとは、そういうことです。しかし、遣わされた者たちは、迎えられるなくても、拒否されても、「しかし、神の国が近づいたことを知れ。」「それでもイエスさまはあなたを救いに来られたのだ。あなたのために十字架に架けられ、復活し、御業を成し遂げられるのだ。」その事実を、告げて行くのです。

神の国を、救いを、受け入れるか、受け入れないか。それは神さまの御前に立つ一人一人が、自分自身で神さまにお応えすることです。しかし、罪に絡めとられ、自分の考えに凝り固まり、頑なで、プライドの高いわたしたち人間は、素直にイエスさまを受け入れる、ただそれだけのことがとても難しいのです。

しかし、神さまは聖霊を遣わして下さり、一人一人に導きを与え、時を与え、機会を与え、色々な者たちを何度も遣わして、神の国を告げられます。そして、神さまご自身のみ言葉によって、神さまを信じる信仰へと一人一人を導いて下さるのです。

わたしたちの頑なな心も、自分勝手な思いも、神さまを受け入れられない罪も、すべて神さまはご存知です。そして、それらの罪は、神の御子であるイエスさまがすべて担って下さったのです。イエスさまが十字架にかかって、「わたしはあなたの罪を負って死んだ。あなたの罪はもう赦された。あなたは神と共に生きることが出来る。あなたは新しく生きることが出来る。だからわたしを信じ受け入れなさい。」そう何度も何度も語りかけて下さるのです。

わたしたちが出来ないことも、神さまにはお出来になります。だから、わたしたちが神の国を告げたのに、迎え入れられなかったと言って、諦めたり、落ち込んだりする必要はありません。そこには神さまのご計画があるのです。

神さまは、豊かな実りを約束して下さっているのですから。収穫の主が、神の国を実現して下さるイエスさまご自身が、「もう沢山実っている。だから行ってきなさい」と、わたしたちを送り出して下さるのですから。

わたしたちは神さまの約束を信じて、イエスさまが実現して下さった神の国を、罪の赦しと命のご支配を、喜んで、多くの働き人と共に、宣べ伝えていきたいのです。

そこには必ずイエスさまご自身が来られ、その人と出会い、恵みを注ぎ、救いを実現して下さいます。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを罪と死の支配から、神の恵みのご支配に置いて下さるために、救い主イエスさまを遣わして下さいましたことを感謝いたします。

神の御子イエスさまが、救いの御業を成し遂げ、神の国を実現して下さいました。苦しみを受け、十字架に付けられ、葬られ、甦り、わたしたちに罪の赦しと、永遠の命を約束して下さいました。わたしたちは、ただその差し出された救いを受け入れるだけです。このようなわたしたちを神さまの子どもとし、神さまと共に生きる者として下さったことを感謝いたします。

この神の国の恵みを、イエスさまは全世界の人々に、すべての民族に知らせようとしておられます。どうか、わたしたちを遣わして下さい。

そして、神の国が告げられるところで、イエスさまご自身が生きて働かれ、救いの御業を行なって下さいます。神の国を告げられた人々が、聖霊によって、心を開かれ、イエスさまの救いを受け入れることが出来ますように。神さまが招き、その御手をもって一人一人を捕らえて下さり、イエスさまの救いに与って、神さまとの平和に生きる幸いを与えて下さいますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン